

みんなとともに笑顔いっぱい — 「学びあい」「認めあい」「高めあい」 —



みんなとともに



7月に入り、令和3年度の教育活動も、3か月が過ぎました。「ケの日」である「日々の学び」の場と、「ハレの日」である「学校行事等」の場を組み合わせ、子どもたちの力を高めています。お陰様で、いろいろな困難がある中でも、子どもたちは順調に育っています。本校では通信票を年2回としていますが、学期末である7月の教育活動を充実させる意図を含んでいます。ご理解をお願いいたします。



「宿泊学習 プレイバック」

5年生24名と、2泊3日の「宿泊学習」に行ってきました。宿泊学習の様子は、本校webページに「宿泊学習 その1」から「その22」として、速報として写真を随時載せていました。写真を見て、少しは安心していただけたでしょうか。そして、帰ってきてからお子さんとお話をする材料になっていたら、うれしいです。

【校長のつぶやき】 その80 「火起こし顛末記」

油断をしていた。宿泊学習がこんなに「火」を使うものとは…。1日目の「焼き板づくり」、2日目の「野外炊飯」そして「キャンプファイヤー」と、何もないところからマキを組み、新聞紙に火をつけて「炎」を大きくしていく。「火起こし」をいつしかの記憶も定かでない自分としては、“不安”がとても大きかった。

その「野外炊飯」のことである。見たら、1つの班の「釜」の火が消えている。「火の管理担当」の自分としては、見過ごすことができない。火を起こし「吹きこぼすまで」と思って、マキをどんどん加えていた。その結果、「ごはん」は焦げ、子どもたちのテンションは大きく下がっていた。「焼きおにぎりをカレーで食べるのもいいですよ」という「やさしい言葉」に支えられ、「思い出に残るカレーライス」の時間は過ぎた。

実は、ここからが大変だった。「焦げた釜」を元通りにしないと、「片づけてよい」という所員のOKがない。みんなで交代しながら必死で釜を磨いた。その協力する子どもたちの姿は、本当に素晴らしかった。

今まで「白いごはん」が出てくるのは、子どもたちにとって「あたり前」だったことだろう。「ルーのかたまりがちょっと残ったカレー」を食べることはなかったであろう。「野外炊飯」の体験から、「親」への感謝の気持ちや、日々の「あたり前」への感謝の気持ちを感じてもらえたら、うれしい限りである。

【校長のつぶやき】 その81 「私とあなたの生活習慣」

引率に行くと、子どもたちと一緒に風呂に入る。いつものことだが“大きい風呂”を見て、子どもたちは興奮気味であり、隙あらば泳ごうとしている。一心、校長の目は気にしているようだ…。

ふと見ると、ある子が歯磨きをしている。おそらく家でも風呂に入った時に歯を磨くのであろう。それは、彼の「習慣」である。それを見ていた別の子に、歯を磨き始めた子がいた。推測ではあるが、ほかの子の「習慣」に触発されてマネをしたのかもしれない。その場面を見たときに、集団生活は「私とは違う生活習慣」に触れる機会にもなるのだろうと思った。

2泊3日の集団生活は、“私”と“あなた”の「生活習慣の違い」を感じ、「自分の習慣」を見直す機会にもなったのかもしれない。

【校長のつぶやき】 その82 「本校の子どもたちのよさ」

子どもたちの「5分前行動」の意識は高かった。活動も順調に進めることができ、余裕時間を多く取ることができた。「シューズのかかとをそろえること」もよくできていた。

そして、何よりも特筆すべきは「男女の垣根なく仲がよい」ことである。3日目の「オリエンテーリング」が終わって時間があつたので「アスレチック」で遊ぶ時間を作った。丸太が並んでいたり、タイヤが埋まっていたりしたが、自分たちで遊び方を工夫して、心から楽しそうに遊んでいた。

「退所の集い」の挨拶では、「宿泊学習」の目的である「規律・協力・奉仕」に取り組んだ子どもたちの姿に「花丸(大変よくできました)」を与えた。とともに、「仲間に甘えず一人一人がもっと高まっていこう」と話した。今回の宿泊学習を契機に、さらに子どもたちが成長し、立派な最上級生になることを期待している。

【校長のつぶやき】 その83 「保護者の皆様への“感謝の気持ち”を込めて」

コロナ禍で「感染リスク」も心配される中、宿泊学習に子どもたちを送りだしてくださった保護者の皆様へ御礼を申し上げます。他地区ではあるが、保護者の方から不安の声が上がり、宿泊学習が中止になった学校もあると聞いている。また、保護者の方には費用も負担していただいている。今回、充実した体験活動を行うことができたのも、保護者の皆様のお陰と心より感謝している。なお、「帰校のつどい」では、この「感謝」について話をしたが、子どもたちは自宅へ帰って“感謝の気持ち”を伝えただろうか。伝え忘れたとしても、子どもたちの「楽しかった」の一言が、何にも勝る「感謝の気持ち」の表出であったかもしれない。